

門 凡生  
號 3692  
巻

東西嶽山  
北理瓦調  
記行

# 石狩日誌

多丸志樓蔵板

石狩日誌

凡例

一六  
二六  
三六

嶽の地石狩川の巨大な谷に於ては、所々主源石狩岳に於ては、  
昔海より一万余里を歩きたる足跡の奥に、半面を占むる大石狩  
川源の源を、文化及開闢の神聖なる地とす。三年余を以て、  
サンゲソマナイに到りて、是は開闢の地、和人杖を曳き、此嶽を以て、  
年来往する所とす。茲に、嶽の友、余と、余里を、潮り、ウ、ウ、  
取て、西岸、ル、モツ、ペ、小、城、を、聖、丁、己、の、春、函、館、府、に、  
命、を、主、源、を、探、り、岳、を、攀、り、山、流、水、林、を、審、し、歸、り、石、狩、志、七、巻、を、  
著、す、納、む、ま、愛、を、以、て、大、意、を、掲、げ、て、一、志、を、以、て、同、好、の、士、の、即、ち、  
依、て、文、の、跡、漏、あ、る、り、敢、て、後、初、行、あ、る、り、た、り、一、物、を、以、て、



石狩日誌

一

此集と行 五八と歌は原稿七冊を閲し 五八山川地理樹木  
 集鳥と除は物産戸口人び人情地名の和譯と書きたるなり  
 宗延紀之序 申の立札は江戸下五所形原及びの餐熱豆居  
 破窓の下  
 源の弘志と云

訂石將日誌

伊勢 松浦竹四郎源弘著

安政丁巳四月念五日大塚集イヌヅカと函館港を費し大井村小宿より  
 黒松内越クロマツノイ西伏スツ、小出此方より大塚氏オホツカに袖余儀ソデノヒあり  
 五月朔日快晴刻本船コトキツネを求て土人スイドサケヌカルと相く或人を  
 雇てシリベツ川小瀬を計満漲水勢起波濤片々舟フネナリ  
 終ふ志を遂トガて二日は夜に帰る渡りもの小屋小宿  
 三日黎明越雷電岳ライデンノヤマ到岩内イハノイを長セベンケと呼ソウツケ切を被ふ  
 四月早雇土人土名山少入里夜イクレユニケルベレバ小宿宿







毛の毛を脱い一毛不虫精けけ也  
 キナウシナイ チヤシナイ等々との  
 所々端の有るも不ば取新く  
 ハツとソラチフト 伊ウラシナ あり此  
 川才ニ此又流るる深とトカチ岳る  
 来りるもハセトツクフト是才ハ  
 又流るるもや小人船を叩くと  
 黒唇一人草鞋の中より眺めたる  
 仰りぬる具乃に内ハ文席をきき  
 是ハ見余を鑑きり依て是流てト三



ハセイタハウレの家を皆セツカウレ此  
 家着し一回乃者煙料針糸火酒  
 等をく旅行しむ事ハ余ハ各葱一輪  
 叶と干鮭と又鮫の油を煮て出さ  
 家の傍ハ狸豆 イシケン 粟 マシロ 糠粟 リチチエミ 稗 キス  
 等を作し是皆黒唇の業行りて  
 必彼等未と鮭を不持ま運  
 上倉らりも彼方ハ農業を教を  
 禁んらりて不決して渡りて  
 必依て鍼ハ横柄を附用し





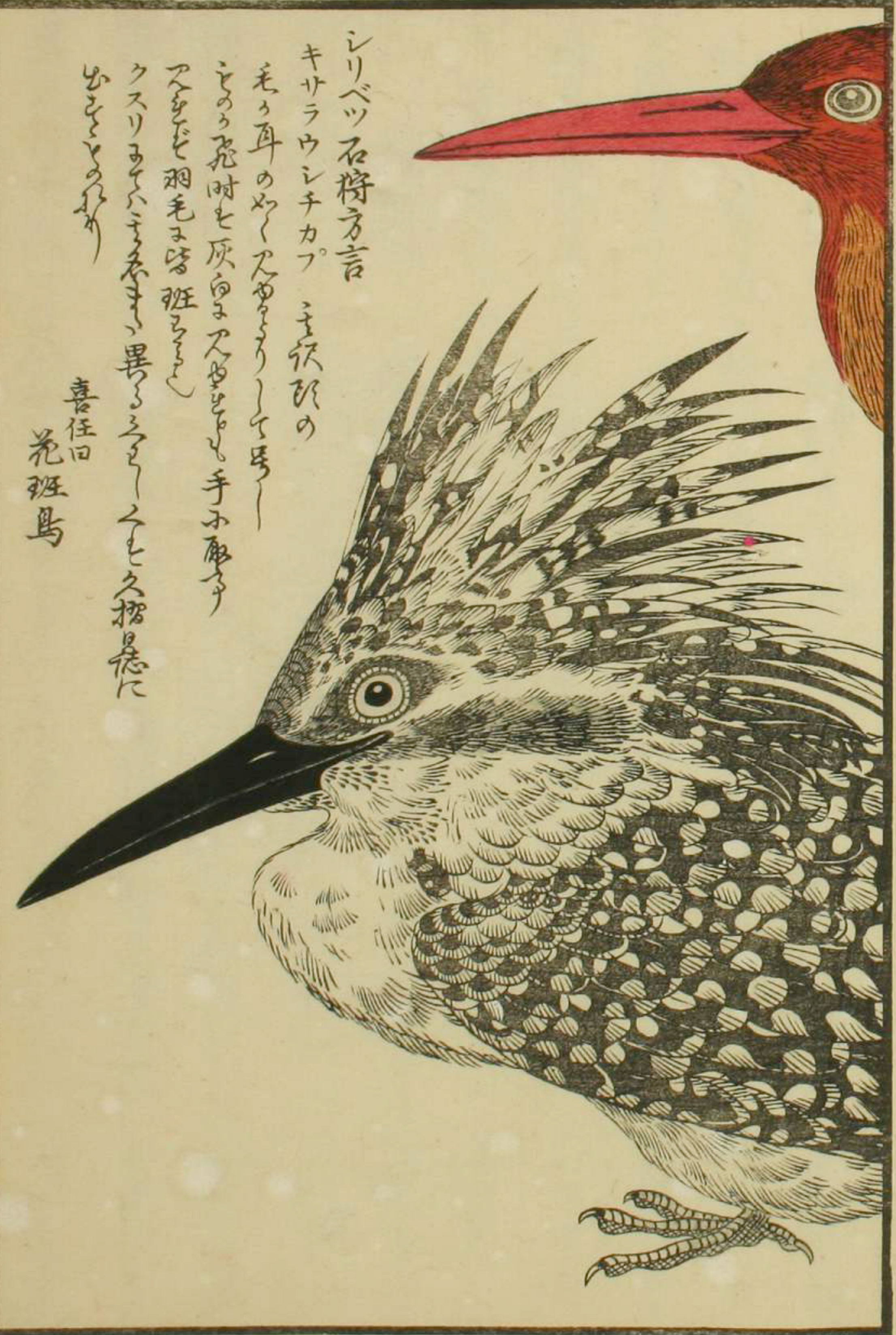
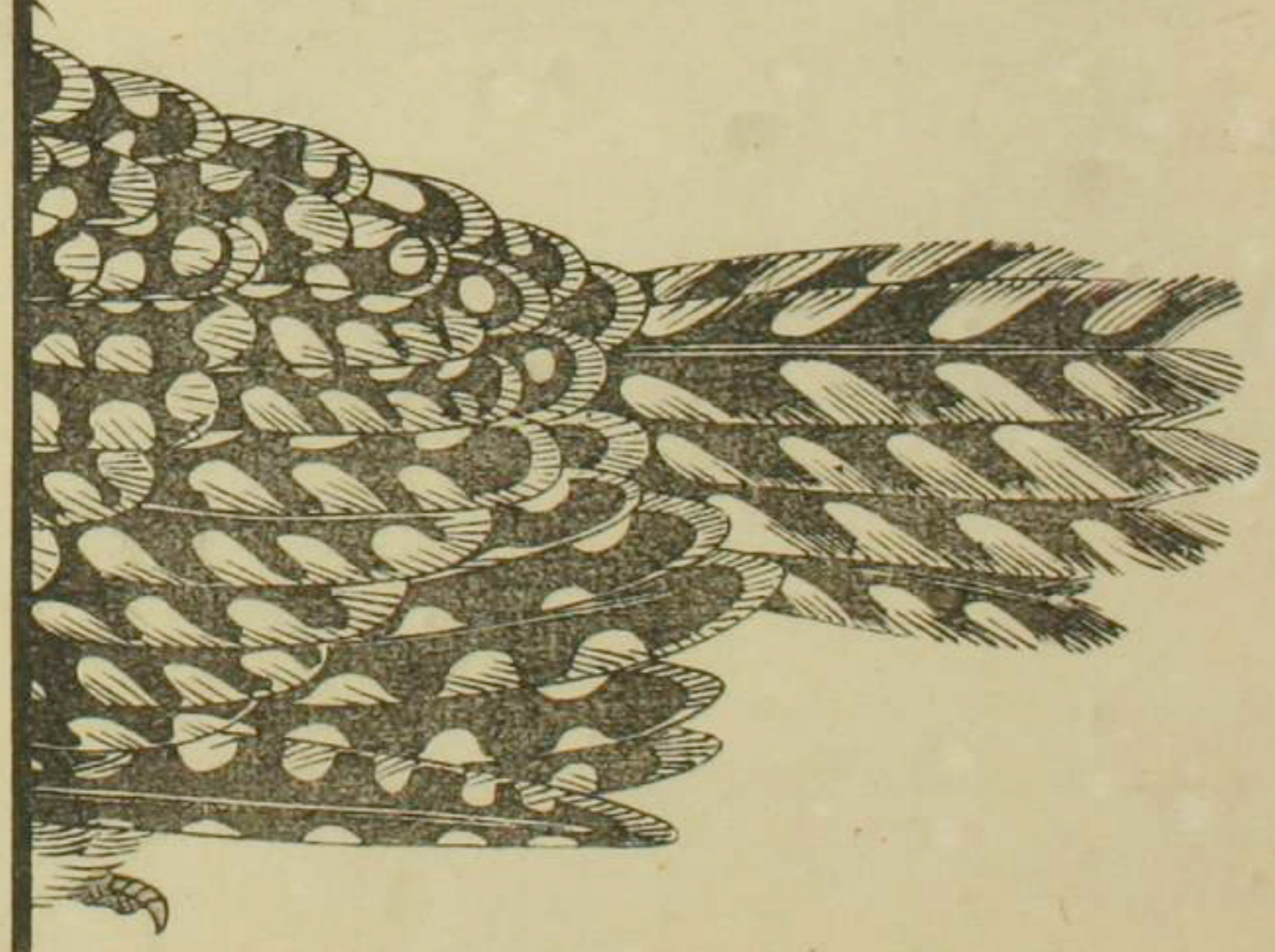


石狩方言

ラニケ 燕や極妻地山深き川  
 喜任曰 夕光まき トウガラシゴマ  
 とくふま ママセミと云山深き  
 一柱人舟ナカニ居る  
 生得も喉とホシ  
 町くあふ号と云



讀書齋主人寫照



シリベツ石狩方言  
 キサラウシチカフ 主候取の  
 毛々耳のやくアガリ  
 そのう飛時を灰向まアガリ  
 アガリと羽毛は班  
 クスリ  
 喜任曰  
 花班鳥







弁皮衣  
服足  
魚肉倉  
資堂  
在此山

神庭の圖  
石狩  
宮江

河裏  
長存太  
古風

木堂



水底と云くもろろ大石清厚く水急く崖樹根枝葉あふり  
 根を露草まじり峻崖を白束と乱りやく或は布と瀑を  
 怪むる此の案除らへんケアソナイアソナイ昔とたは方ニツイ  
 首<sup>鬼</sup>バと云ふ数丈の巨岩の中一穴あり人等も此所を<sup>鬼</sup>と  
 削て途中のあを初るアソナイファイラと云ふ突あつる大岩の流れ  
 碎り流儀を道なきカモイ子トバケと云ふ七八丈の立岩恰も鬼の  
 舩の如き物崎より此の如く急流く二人と物の形も角も  
 上り難く曳三人の水筒も突張余と坂と波拍子事苦  
 志すも大弾移の油をともや黄や首を流すれと云き事  
 程度及ぶレイコロブイラと云ふ河を急流くトレスアラ子ト云

を彼鬼神の操へあつりカハコリ 蒼凌葉貝母カハコリ 籠江化石  
 行りとも此鬼神を種々の縁故ありし人等他を移すと云禁さり  
 と云ふコラコツナイイヌニナイ字書文の流りエタシヘツブト此邊へ  
 耳もや少く湍流を此の如くもれぬこイチカブニと云ふ小山は  
 麓も少く宿をんとらん大坂ありし時程をたあ中俄あり  
 流も小繋きり一夜を明ぬぬたもあふす一絶を記置  
 繫艇垂揚畔霏微暮靄浮蓬窓苦故齧半夜泛中流  
 十九日解船系テカキシリベツサラベツ字をもとチクバツブト一着  
 此所番屋一棟あり先一回の安を祝し船丹をけりし所り人等を  
 定め上川徑の土人より一軒も煙を一抱か人あふ糸針をり其れ



胡女一人出東の番屋この廻り道を指し一異なり

雨餘畧約断其如道路阻隔水對老獠水聲攪人語

女二日夜中より隙窓忍見水源の教習人を定むビヤトキと右は手と

熊小喰らわたり只たのよ一存す不具あきり山井のり香友故に

是を魁首とレリアイノイワンパカルセツカウシヤ人申はる

夕方晴小幣を伴せ少許一筆酒一濁を閉り

山雪映天冷水煙遠樹斜沛然一夜雨滿澗糝楊花

女七日早起解纜を七八丁まむ此所人家五軒クウチンヨ日シユ  
シコトイシリア

老は必何をも駿火五丁足を烟をく其の意を問ふ小艇解舟

ワイノカントキ橋  
ワイランケ橋メムトと屈曲する小流の涌ゆる所を去るこの遠の

山雪映天冷水煙遠樹斜沛然一夜雨滿澗糝楊花

は川に潮もや毒人と括檢する取をも先安のを以程きう加

大おとくもくもくも折能くは朝も解籠る多く漸く是を一刀

きく大い川岸に流るに鱒川より片来を沙流にまらぬや大

飛ひて直に取を咬り持来りふを外のまふを附をりけり

馴る方長行儀互友物け依り此まを老獠は火を大切り

我の喰をる毎小喰をもち其の飼養り秋味の法を一日に四五束

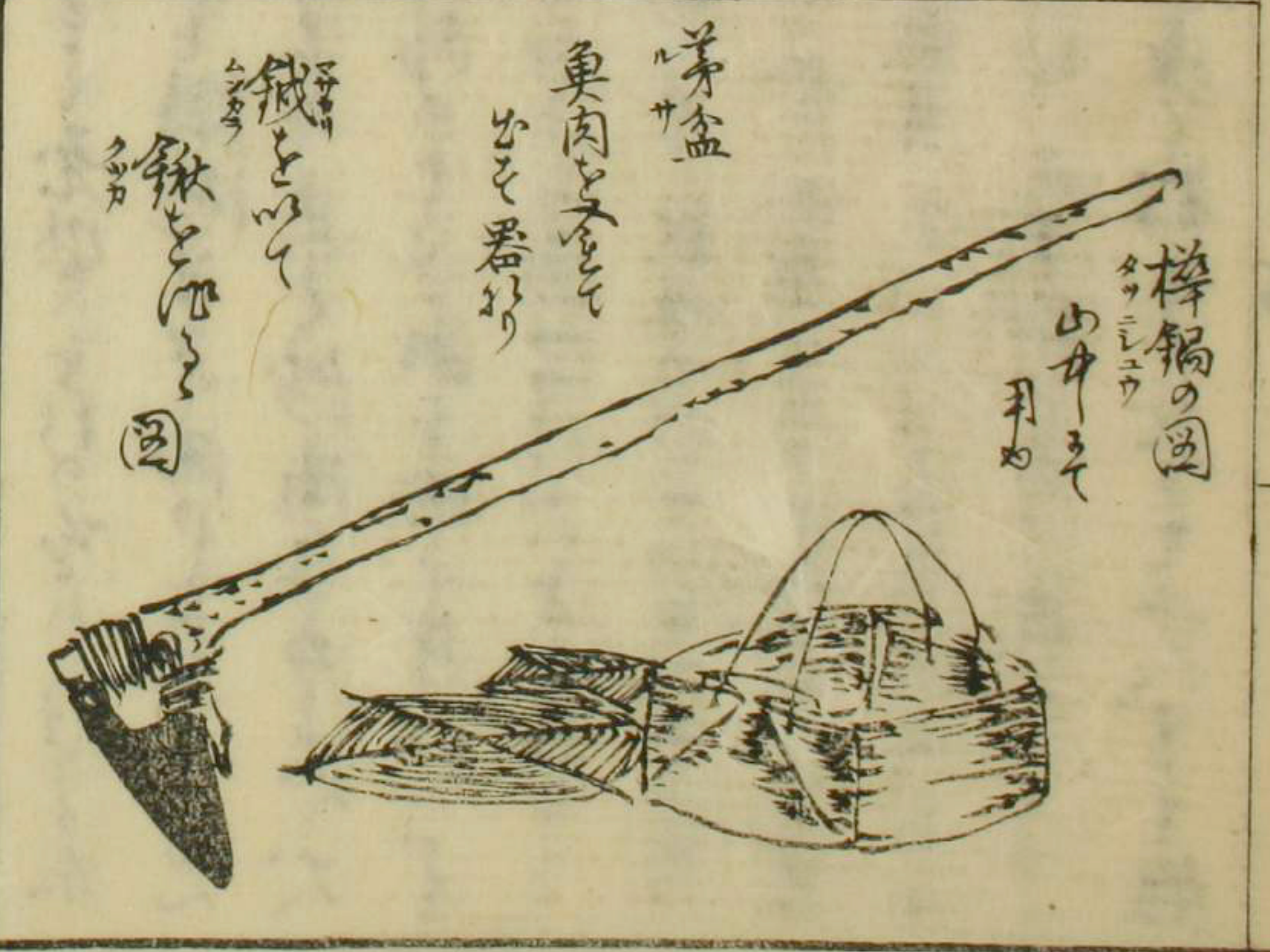
も取獲るや板又出船してや水勢いよく急岸流本

あしウレヘツ地ヲチンカバ同此所教習ビヤトキの家より川をたて

所へ築柵を作りてより鱒を取由けり又黄脚シツカモの来る築立り

不日の去る中陸をて入汁の麩ホシユ多し群きり然を去人をも離

びるをきて捕らんをいふてウエン  
 ギウバ地ヌサワレベ同キンクシベツ同字此  
 所より人家ニ移方イカシセ候又須更  
 してアサカラ爰より人家に此方  
 百を果りニホウンデアイランケ留の  
 多く供よ出逐ひぬ余は蕎麦葉貝  
 母の園子と乳羊根を煮食す此  
 鞋卵をほく是と主人の砂糖を也と  
 云て一笑一同の志を振舞す  
 延胡索 アンラコロを二袋并の  
 黒百合



糧ありも是よりしてウエンベツに宿を此所へ家五軒  
 コマラフコエキ  
 ハシゲル 此所へビ、の主人も呼出さるるありぬ  
 エナラフニ

蓬窓山色曉乱柵水争流烟歛朝暾上處々聽鶉鳩

廿八日朝霧濛々上陸して南岸を眺む寸甲四面を思ふ曠野ありて  
 茅茨款々虎杖種々れども是より長谷に北條の川を離れ目下障なく  
 志々石狩岳に蘇を一時にカ辰をけりて是を此方後牙や其麻の江成  
 使りてけりお流しに満ちて流ひりぬ主人も是をドンブリくや言て  
 行に其言は風をみりてとて晒さるりと故を主人乃法やとて  
 風呂への事外いふ道に上るや中への掃除まをせしむるを  
 ちの病氣もて温泉にても浴をせよ必に衣履を脱すく着の供



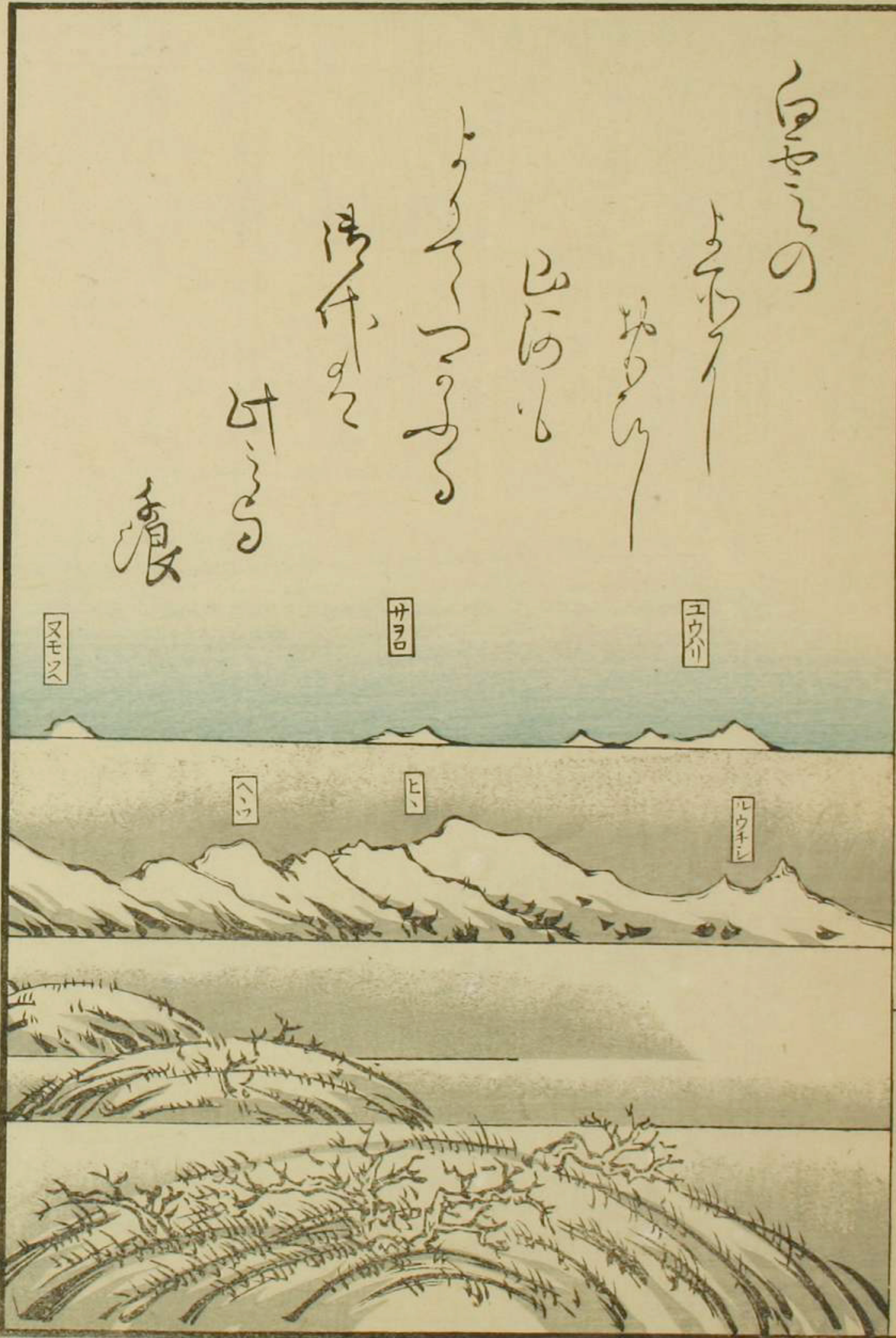
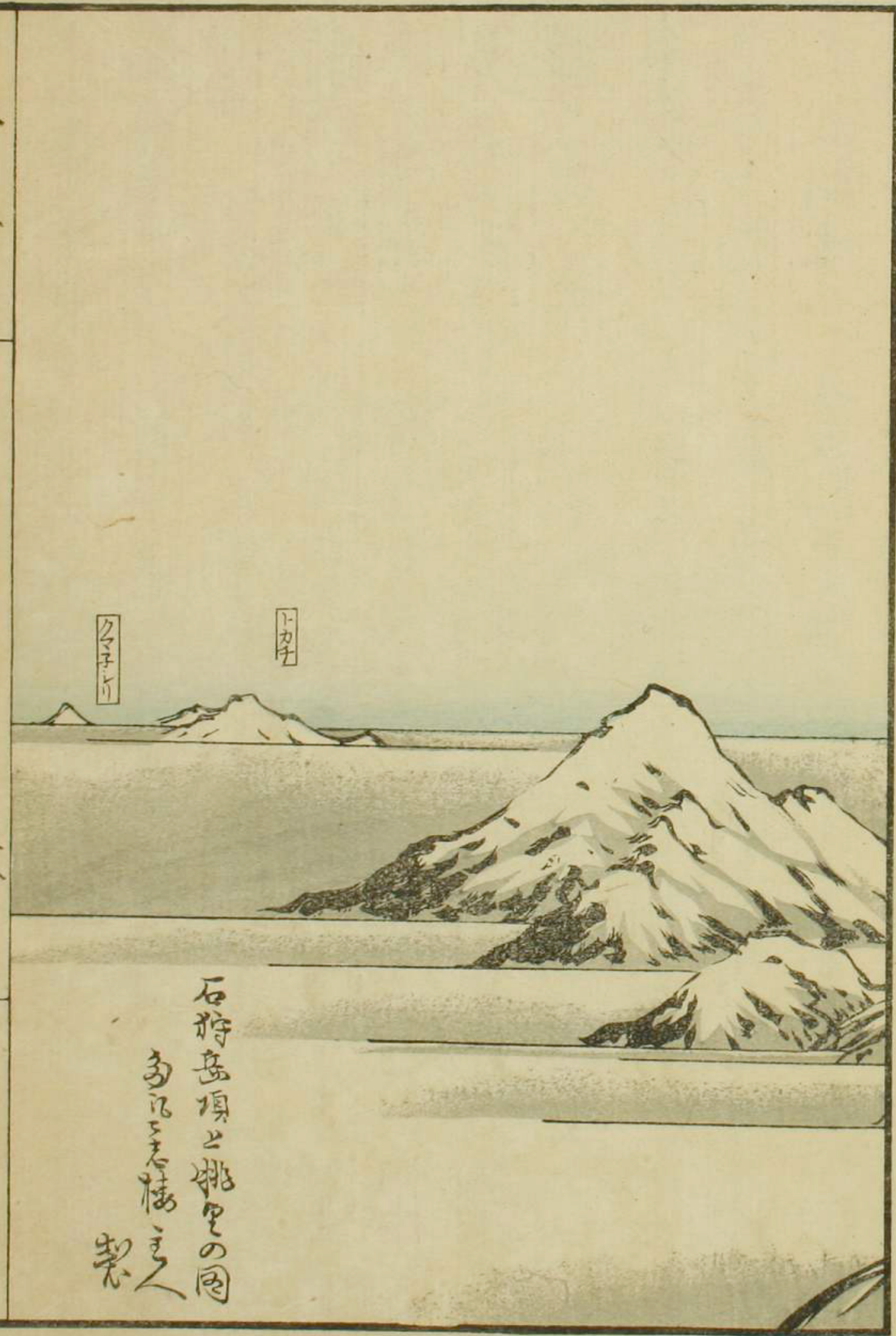
治をりたりたふぬ此よりなり凡四にすて以て<sup>五</sup> 教園に榊柏原  
 子の形り愛ふトコにふふた岩山一つ山<sup>カモイ</sup> 壺無き内めて<sup>ケリカケ</sup> 木幣を立  
 又根をたふすに度土人を必は是を解るはとて又ふさき山三ツ汁をこ  
 夕方イチナシゲ<sup>ルコニ山</sup> とふ所り長川端を益の方及忙政あり  
 故お束にたふぬなり<sup>ル</sup> 幸ふ<sup>ル</sup> 一足もゆきり<sup>ル</sup>  
 夢のたふぬ山は学枕馴年一たふ束を守り<sup>ル</sup>  
 廿九日懐福封山懐も混沌界のや依て流れた傍々や茅おふ  
 主曠き事志き<sup>ル</sup> 此邊鶴多<sup>ル</sup> 其れも少人も是を解き<sup>ル</sup> 鶴と  
 海きり<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 凡二里<sup>ル</sup> 山ふより又り<sup>ル</sup> 二平<sup>ル</sup> 最子岳の半腰  
 とよふた土人<sup>ル</sup> 不問り<sup>ル</sup> 是より山を越て<sup>ル</sup> アシダラ<sup>ル</sup> ソヨナイ<sup>ル</sup> ヘウレ

山を越て<sup>ル</sup> 兼お研<sup>ル</sup> と答へた大ふ力を<sup>ル</sup> ぬ後を<sup>ル</sup> 顧を<sup>ル</sup> 反昨  
 日<sup>ル</sup> 幸<sup>ル</sup> ウエンベツ<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> チクベツト<sup>ル</sup> 目下<sup>ル</sup> に<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 及<sup>ル</sup> 本川  
 龍腕<sup>ル</sup> の<sup>ル</sup> 蓋<sup>ル</sup> 履<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 如<sup>ル</sup> 口<sup>ル</sup> の<sup>ル</sup> 力<sup>ル</sup> と<sup>ル</sup> 此<sup>ル</sup> 方<sup>ル</sup> の<sup>ル</sup> 物<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> ベツヒ<sup>ル</sup> の<sup>ル</sup> 山<sup>ル</sup>  
 石<sup>ル</sup> 嶺<sup>ル</sup> 岳<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 峯<sup>ル</sup> 嶺<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 同<sup>ル</sup> 系<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 心<sup>ル</sup> と<sup>ル</sup> 岩<sup>ル</sup> 俵<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup>  
 大<sup>ル</sup> 昔<sup>ル</sup> 系<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 見<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 本<sup>ル</sup> 系<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 望<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 杉<sup>ル</sup> 対<sup>ル</sup> あり<sup>ル</sup> サシゲツ  
 マナイ<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> へ<sup>ル</sup> 着<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 此<sup>ル</sup> 文<sup>ル</sup> 峨<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 岩<sup>ル</sup> 嵌<sup>ル</sup> 空<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 大<sup>ル</sup> 岩<sup>ル</sup> 岩<sup>ル</sup> あり<sup>ル</sup> 入<sup>ル</sup> 此<sup>ル</sup> 所<sup>ル</sup>  
 は<sup>ル</sup> 文化<sup>ル</sup> 度<sup>ル</sup> 間<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 此<sup>ル</sup> 所<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 此<sup>ル</sup> 窟<sup>ル</sup> あり<sup>ル</sup> 洞<sup>ル</sup> あり<sup>ル</sup> 中<sup>ル</sup> へ<sup>ル</sup> 行<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup>  
 此<sup>ル</sup> 邊<sup>ル</sup> 約<sup>ル</sup> 十<sup>ル</sup> 里<sup>ル</sup> あり<sup>ル</sup> 眼<sup>ル</sup> 開<sup>ル</sup> き<sup>ル</sup> 難<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 連<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 大<sup>ル</sup> 山<sup>ル</sup> 困<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 由<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 川<sup>ル</sup> へ<sup>ル</sup> 飛  
 込<sup>ル</sup> 渡<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 産<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 大<sup>ル</sup> 山<sup>ル</sup> 刺<sup>ル</sup> 殺<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> の<sup>ル</sup> 存<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 宣<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup>  
 思<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> ぬ<sup>ル</sup> 又<sup>ル</sup> 一<sup>ル</sup> 徑<sup>ル</sup> を<sup>ル</sup> 越<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 炭<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 岩<sup>ル</sup> 壁<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup> 置<sup>ル</sup> たり<sup>ル</sup>

山蹊與水涯原野又林樾晨發認熊蹤暮天投狐窟

世日起嗽湯沸水烟滿洞咫尺不無窅不異域之趣有窅此日の嶮危  
 小夜夢ハレとレしハ川涯ノ人ヲを促ハ川岸ト互ハ川ノ絶ノ下  
 一々ノ新ノ山ノ又是より無嶮悪クハ老樹朽倒箬落りテ錫打錫打の  
 此所は石口ノ矢ト賊ハ一囊の米を携へテ行クハ不方ノ氏ハ此所より  
 互ハ行クと云ハ余も再警悟一出ずモ如シ酸辛と嘗テ後の禮也ナリ  
 國家の為と相笑マ出スと云ハ兩岸ト戦ムと云ハ未だ未だハ沢俣  
 中ニと云ハ未だ未だハ又一時半斗ヲ山ト此所來ル  
 互ハと云ハ丑寅ノ力ハテレホノ巔ト人寅の力ハチトガニウレ知ルハと  
 眺みぬ又以テ須更と云ハ雪も入リト半時斗ヲ小川ニテ所ト

るとアンダラマ地のを不出る番本を倒シ橋ト行ク向者越此所献春菜  
 胡荳草罕藕芋也一又如石楠花一面不々々り長り土人と是を  
 茶の代小煎ル々々香氣と佳く又一時斗樹立の山を雪路は便り也  
 下リソヨマナイ地と云ハ知ル此川解多キナリ捕まりキ斗ノ依テ  
 窅あり一宿一川入リた水の冷々々足先切リ斗終時ハ五六  
 十尾を得り又又刻さシ鳥數多ク人嘗テ鳥雀の類をカシクヤ  
 向岸ホ一ツの海を是とルベシと云ハ小海岸ユウハツ昔越スる  
 次目行ル也且奥不足程力ハチトガニウレを又入リ斗扱土人  
 斗と樺皮と削テ丸小豆と補理是と曲テ筵と是を飯を食フ  
 又扱樺皮と削テ丸小豆と補理是と曲テ筵と是を飯を食フ





川の  
 山乃山  
 あるせよ  
 福  
 山乃  
 ま  
 花  
 船  
 尾



西南麓きチクベツ岳ベツ岳ビエ岳等々を登りて峰密馬の背の  
ゆく連続するまじくとトカチクマ子ヒリサラロユウバリの岳より  
を登りてゆく雲中へ登りては  
四面も多数の群山麓迄波瀾の響湧をかく其名を指  
示するゆへに何れも是れ必ちなり大不望を告ぐぬ  
然るも石狩の水深と此岳を登りてトカチ岳の百餘りゆへ  
正さるる所慎みかん定め極むると移るる人とは移るる山岳を  
ふりてなかりし是も今も遺物あり我々志をなす情ありゆへ  
終りぬ叔爰ハハハハ半時立休むる空風吼と砂ミゲル戦栗ミゲル人々  
極る飯を喰ふをぬかんれと凍るる向成りゆへ是も此地の威を

思ひぬゆへ依りて来りし本幣の柄は二倍を行山上の一円は群れぬ  
三日己攀盡雲鬚與雪肌仰看天地大俯覺氣候異  
叔是より三鬚松の枝を折りて履爰杖を小脇に抱てゆりて終一  
小半時に昨夜の宿所の上着ぬ爰を一椀の米を粥ハハ煮て食ふ  
山上の空を急ぎゆへ道ハハ道を急ぎゆへたペウレの川ゆへ  
三日の晨出立雪を登りてゆへにアンダラマハハハハ  
雪への筋をゆりゆへにサングソナイハハハハトハハ後痛ハハ  
を固より夜に入ると降り降り降ゆぬ叔は是れ所まで登りて  
白雲は空をまじりてゆく雲中へ登りては  
五日雨天を降ゆトハハ此所の焼対場とて神甫湯を築く









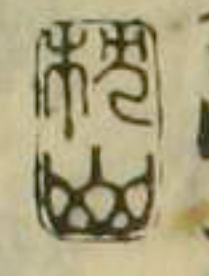
湯を依て五岸の岩より勢く眺望するに水烟吹来り机をくするあり  
新しき紅袖西に傾けやま映るや 虹霞の如く輪をけ 眸をるる方  
我等の容彷彿と瀑布の面は紫金の色に似ぬ土人あは是を怪し  
神と称す余をも我もこの人の氣の味をを以て論ず土人と山雲のふ  
とく低頭する依りてふ止る余待るふのチライを此ふまにた流面一  
尾の紫金集を現ぬ是をみて漸く土人も我もふと是を又従り  
糸くくゆは是別阿波の國灌頂の流の不劫の末途と稱をも同利たり  
彼をきききり只流面は烟のや火燭の燃るや有る人ふ不劫の形あり  
はま此に異草の枝をたれも土人の言は任そ一葉ともふ取ら角別も  
香りやりの大く道く生きたは流を流ぬ石とあり白筋らるる不英と  
合

ぬ又小き琥珀を多く拾うる品座と同一結をた百露を晒すは  
切能は為さきやお思ひあは是を頻りに脂の土中を凝りしよる塵  
を吸ふことと南に産するは巨けは深テレポのうらうらとあり  
十五日宿未散起て艦一たり激浪船より打入故まぬ方ふキナを立  
所りしころワソカリと以て水とて土人等みんを拵と稱へた是も  
はる突は眩む半たり四とちカへさるる夕方イタイヘレに宿ぬ  
十六日浪も深く早散を午後トツクは美しき  
十七日曉霧如例かまソラフチフトり入須更はラホンゲツラレユラマ  
ナイと越此邊屋かま針伝や辰已不取れと九つとをより  
たふ追く高山樞本立たりま崖石炭とんる子散及ナエークラ

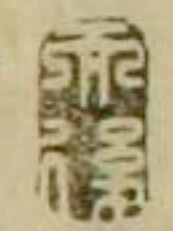




石碣山  
 陰色上  
 大澤亭

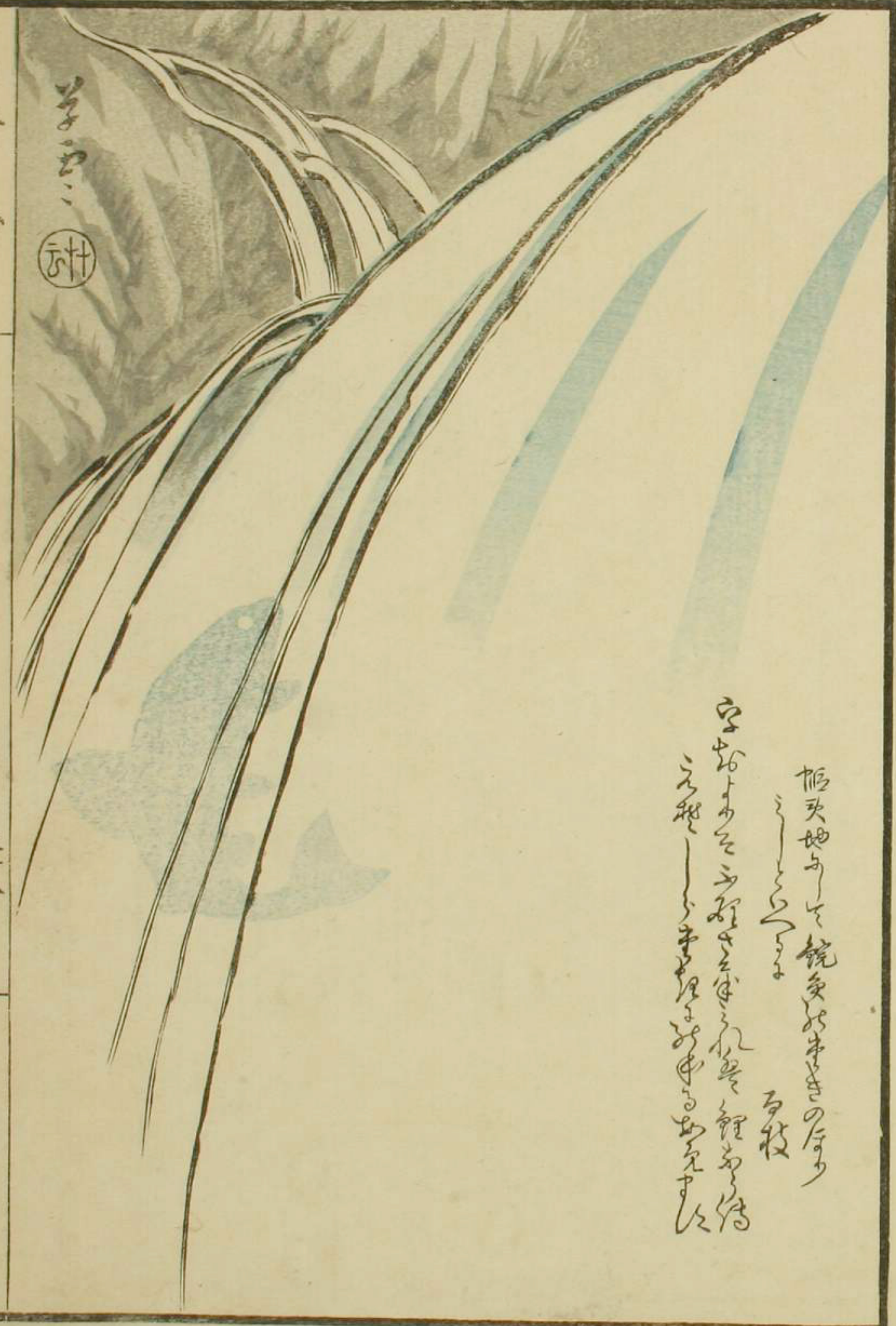


石碣山  
 陰色上  
 大澤亭



夕陽亭  
 寫景

夕方ゆき来りて瀑布の下の土人等鮭鮭を数テ尾取獲り余福也  
 嘩々大鮭を眺せ居れば何れ鮭の面を閃く物も人定むと  
 臭の勝をやら其の時目も閃くも其時刀入富らなり  
 一度は時魚りし中知り然も都令と上場を十度  
 二度三度より只鳥影の映るに刀入も板に魚を何れ也  
 ずは鮭くと鮭鮭チライは一丈位をよきとさう高きと  
 上場と依りし鮭より上は鮭と嘉魚似嘉魚鮭は土鮭の  
 と我ら鯉の就門よりを深く怪しと度漸くのりて虚説り  
 とも成る然ももさう方丹も家の画や臭う素麵を喰ふ  
 松半優く物あると板を鮭の西一のき深と成るる終り一丈



石橋  
 廿

板天地より鮭鮭の  
 石橋  
 石橋

七八尺斗のりり両岸より挺出する岩間の石お落す故に後尾標を吹  
くやくら電流の急ら電と和語ソウは流の夷之形電は似たり  
一早らるとのりり遠く推難本立岩峻く岩る人金鶏師 石葺  
蒲公英之餘種物の石と物と母の氣らつるる石段よ  
解腕を居りて一宿一宿の宿よ一絶をまゝりて五

奔泉激岩石碎作雪花飛閑坐暫相望餘波忽濺衣

真の子のあつてをいふ人落つるまゝをありく位山の那

女日前日の路を取上船急流は掉下り夜入春川へ出トツク一宿  
女一日快晴暖きセツカウレトミバセを家よ砂一シリアイを上川へ隔  
ニホンデ タヨトイの西人をまゝ余と三人控を居下りヒハイ一宿

女二日居る九ツとツイレカリ一暮夜入石橋之小屋一宿一宿二日  
振子結髪体活襪被りて卧たる人知る人等の意味を其の如く  
依り一絶を賦一絶あ心を枕上の灯をまゝりて五絶

熊峯孤崖將三月泛宅穹虛亦有情憶嘗成吏受羈勒須

化鮭魚願再行

女四日鎮坐居る所一宿

女五日當所難供人五夜を来りて并居る五夜を来りて并居る  
タラナルナイ場所学人者合る鎌を以買すち来りて并居る  
女作渡りて其の厚を感佩とて人者餘事行りて

石橋日記終

沈熙遠曰。天地之氣各以方殊。而人亦因之。南方山水蘊藉而繁好。人生其間得氣之正者。為溫潤和雅。其偏者則輕佻浮薄。北方山水奇傑而雄厚。人生其間得氣之正者。為剛健爽直。其偏者則麤厲強橫。此自然之理也。於是率其性而發為筆墨。遂亦有南北之殊焉。惟能學則咸歸於正。不學則日流於偏。視學之純雜為優劣。不以宗之南北分低昂也。余自幼好畫。經歷諸州而驗之真山水。果如沈子言矣。往者伊勢人多氣志樓主人。著北蝦

夷餘誌其所載山水。奇傑雄厚。甚過於余所見者。焉。或曰主人不學画山水。而得南北兩宗之趣。何也。余曰主人產南國。萬里窮朔方。故其所寫能得真趣。如南北未判之時也。夫畫山水判南北者。官士文人遊戲耳。養心耳。而寫真則頗有關於闢國治世之要務者矣。余無官無文。以畫為業。多識南北山水。特未見蝦夷之山水。一日主人持其所画石狩真景及草木器物虫魚稿本。請余淨寫之。余辭曰。主人之畫已得其真矣。又何以余筆之為。乃

書此語於卷尾。以付主人云。

萬延庚申深秋五顯生辰前三日於東台

南麓水雲山房西窓下 北總鷺湖木雄



單山高常書





石  
神  
山  
記

